

SHIBUYA QWS Annual Report 2025-2026



SHIBUYA
QWS

問うだけじゃなく、
出会うだけじゃなく、
生み出すだけじゃなく、
世界を変えよう。

ふと湧き上がっては、消えていく雑多な想い。
身近なことや、世の中に対するさまざまな問い。
何かが生まれる時の感動、驚き。
この街に溢れるエネルギーを
集めて、磨いて、解き放つ。
ここには、
アイデアをカタチにするための、
仲間と、ノウハウと、圧倒的な推進力がある。
さあ、踏み出そう。
あなたの一步を、小さな気づきを、
世界を動かす、大きなうねりへ。



Question With Sensibility 問いの感性

SHIBUYA QWS（渋谷キューズ）という名称は「Question With Sensibility（問いの感性）」の頭文字。物事の本質を探究し、常に問い続けることが、新しい価値につながる原点になるとわたしたちは考えています。自らの問いに出会い、磨き、放つことで社会を変えていく力を創造したい。そんな人たちを待っています。

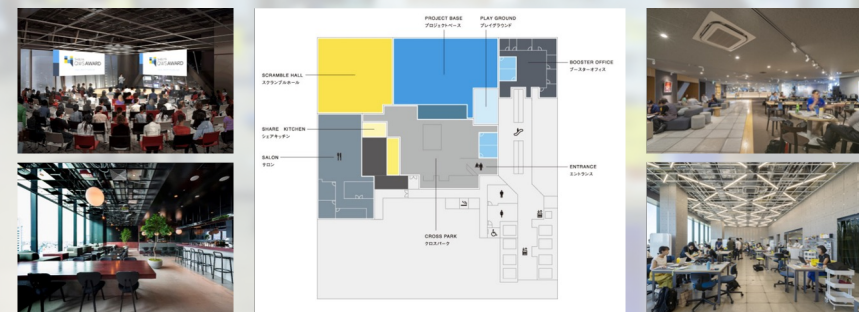
What is QWS ?

SHIBUYA QWSは問いを起点にした会員制の共創施設です。



QWSで活躍する4種類の会員

活動をするチーム単位で登録するQWSプロジェクトメンバーをはじめ、企業や自治体などの法人格で登録できるQWSコーポレート/パブリックメンバー、各分野のエキスパートとして支援するQWScommons、個人で会員となるQWSメンバーと、4種類の会員が活動。多様なバックグラウンドや活動領域の人たちが交差交流することで、“新しい社会価値につながる種”を生み出すことを目指します。



約2,600㎡、価値創造に特化した多様な空間

新しい価値創造に取り組む場「PROJECT BASE（プロジェクトベース）」。人々が行き交い、交流するリビングルームのような空間「CROSS PARK（クロスパーク）」。メンターが集う「SALON（サロン）」。200名規模のイベントが開催できる「SCRAMBLE HALL（スクランブルホール）」など、共創と支援を促進させる多様な空間を提供します。



野村 幸雄
Sachio Nomura

SHIBUYA QWS
エグゼクティブ
ディレクター

開業する3年前から開発し実装したコアプログラムの一つでQWS CULTIVATION PROGRAMを初めて全面アップデートし、問いの価値を見直し事業とつなげていくことで、より実践的なプログラムになりました。また、「問いを起点にしながら、新しい価値や可能性を生み出していく存在」を「Questionpreneur」と定義提唱しました。開業前から数えと問いを施設の基軸にしてから10年経ち、新たな社会価値に繋がる様々なムーブメントの兆しが生まれるプロセスを鑑み、生み出す主体の会員さんを象徴する言葉として表現しました。Questionpreneurという概念を広げ、育成と支援を通じて新たな価値創出に貢献して参ります。



上原 仁
Jin Uehara

Coalis
ジェネラルパートナー

CoalisはQWSに創業準備段階からお世話になり、Day1から5名が集って創業を迎えました。ファンド設立後はブースターオフィスをお借りし、入居起業家やQWSコモンズの皆さんと交流・共創しながら、秘匿性の高い業務も行える環境を得ています。QWSの魅力は、起業家からアーティスト、アカデミア、大企業、自治体まで多様な人々が集い化学変化を起こせる場、多様なイベント、それを支えるスタッフの皆さんの丁寧なサポートです。偶然の出会いでしたが、スタートアップエコシステム全体にアプローチする私たちにとって最良の環境だったと今強く感じています。



藤本あゆみ
Ayumi Fujimoto

一般社団法人スタートアップ
エコシステム協会 代表理事

QWSは、「問い」を起点に多様な人が出会い、新しい挑戦が次々と生まれていく稀有な場です。スタートアップ支援に携わる中で、分野や立場、世代を超えた共創がここでは自然に立ち上がっていく、その空気感にいつも大きな刺激をもらっています。渋谷という街の力と、QWSにいる一人ひとりの探究心が重なり合うことで、ここから社会を動かす新しいうねりが生まれていくはずですが、これからのQWSが、挑戦する人たちの背中を押し続けながら、国内外のエコシステムをつなぐ結節点として、さらに大きく広がっていくことを心から楽しみにしています。

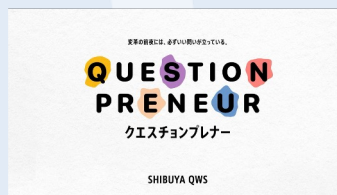
2025-2026 — SHIBUYA QWS 2025年度のQWS振り返り&ハイライト

highlights

01

『Questionpreneur』を提唱。 問いを起点に価値を生む新たな人材像

新たな人材像「Questionpreneur」を提唱しました。問いを起点に新しい価値を生み出す存在で、起業家に限らず、企業内で新規事業に挑む人や研究者、地域課題に向き合う実践者なども含む概念です。QWSのプログラムや連携を通じ、こうした人材の輩出を目指します。



highlights

02

法人・自治体との共創を加速。 『共創テーマポータル』の運用開始

QWSコーポレート・パブリックメンバーが実現したいプロジェクトテーマを掲載する「法人・自治体共創テーマポータル」の運用を開始しました。QWS内でのオフラインの出会いにとどまらず、会員同士がオンラインでテーマを探し、直接つながれるプラットフォームとして、新たな共創プロジェクトの創出を後押しします。



highlights

03

産官学文の共創を加速。 『Linn Co-Creation Program』始動

「暮らしと住まい」をテーマに、企業・自治体・大学・クリエイターが領域を超えて共創する「Linn Co-Creation Program」を開始しました。全5回のワークショップを通じて40件のプロジェクトアイデアが誕生し、うち3件が産学連携プロジェクトとして推進中。



highlights

04

Y Combinator代表が渋谷へ。 グローバルネットワークをさらに拡充

国際的な連携をさらに広げた一年。2025年11月にはY CombinatorのGeneral Partnerが登壇した「Tokyo Founders' Day 2025」を共催。またフィンランドのCrazy Town Oy・Aalto Entrepreneurship Societ・Startup Sauna、および韓国の光州創造経済革新センター・ソウル創業Hubとそれぞれ施設間連携協定を新たに締結しました。



Numbers

数字で見るQWSコミュニティ

2025年度（2025年4月～2026年3月まで1年間の数字です）

QWSで生まれた問いの数

6104回

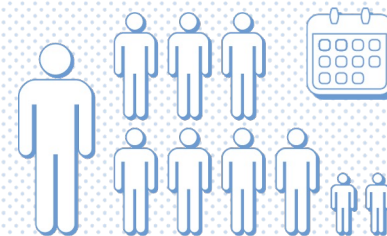
問いを掲げることがスタートです。
日々の問いから、ビジョンにつながる問いまで。



イベント開催数

1318回

平均すると1日に3回ペースで
イベントが開催されています。



プロジェクト面談数

201回

活動を促進させるため
のサポート多数です。



サポート数

294回

日々寄せられる
個別相談にも伴走
しています。



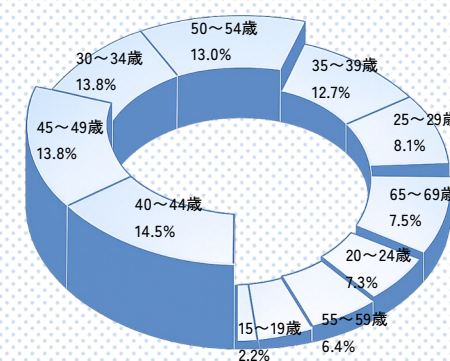
来館者数

3万 4,424人

たった1年のなかでも
多くの方がQWSに訪れています。



QWS会員の年齢



2025年度のQWS会員の年齢層は10代～60代まで幅広く、満遍なく様々な世代がスクランブルしながら活動しています。

※2025年6月時点

ピッチ

124回

QWSステージなどで
問いを放っています。



メンタリング数

523回

コモンズの方と壁打ち
できる機会が毎月！



国内外 連携パートナー数

48団体

海外含めた様々な拠点や
団体と連携しています。

Project Pickup

QWSは0→1に特化した施設のため、様々な会員さんがいます。ここでは卒業したメンバーも含めてメディア露出や、アワード採択、第三者評価などを中心に2025年度中に活躍したプロジェクトをピックアップしてご紹介します。

長期療養児を対象にした、ライフアドベンチャープログラム

Child Play Lab.

心から湧き出てくる願いや目標が生きる力になりうるのか？



Forbes 「『ソーシャルR&D』を実装するNPO50」
「NEXT100 世界を救う100通りの希望」選出／若者力大賞ユースリーダー賞受賞／日本財団 助成金採択／ベネッセこども基金採択

その場でわかる「脈あり」会話マッチング

e-lamp.

もしも「心」が可視化されたら、社会はどう変わる？



AERA 「21世紀をつくるニッポン人名鑑」選出／
AOAO SAPPOROとの共同プロジェクト始動

Age-Well社会を創る

AgeWellJapan

どうすれば誰もが歳を重ねることを楽しみにできる社会を実現できるか？



日経「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2026」受賞／
累計3.1億円の資金調達達成

ギャル式プレスト®

CGOドットコム

🌈ギャルマインド🌈は世の中をアゲ💖にできるのか?!



IVS 2026 インベスターZ賞受賞／他社との共創PJ実施7件（JR貨物（QWS会員）とのポップアップイベント「ギャル神社」他）／テレビ・新聞・ラジオ・Webなど100回以上のメディア露出

GPU×シェアリングエコノミー

JANCTION

GPUを必要とするすべての人が、安価にAI開発や高速レンダリングを行える社会は、どんな創造や産業を生み出すのか。



FIN/SUM 「ソニーフィナンシャルベンチャーズ賞」受賞／Vienna Startup Package 採択／Start up Award Google賞 受賞／NII、日本大学等へGPU提供開始

世界7000言語の翻訳できないことばを使った企画展示

kotoha

消えゆく言語を守るためには？



日テレ「ZIP」取材出演／WE AT Selected Student Entrepreneur 「学生賞」受賞／MAHHA CHOCOLATEとコラボ商品製作／「阿佐ヶ谷アパートメント」出演

Project Pickup

QWSから見てくるムーブメントの兆し

医療・福祉モビリティインフラ

mairu

誰もが行きたい場所へ移動できたら、
どんな世界になる？

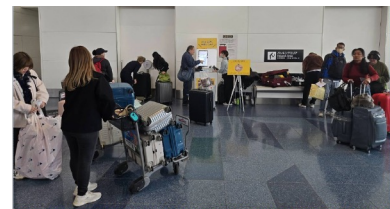


mairu mobility設立・本格的なサービス運行開始／
「Forbes Japan 30 Under 30」選出／日経クロスト
レンド「未来の市場をつくる100社」選出／テレビ
東京「WBS」出演

服を手のひらサイズにする圧縮技術の開発

PocketTips (ぽけっとちっぷす)

好きな服を好きだけポケットに詰め込んで宇宙
旅行に行くには？



NHK総合「午後LIVE ニュースーン」出演／テレ
東「WBS」にてプロダクト特集／TBS「Nスタ」に
てプロダクト特集／Forbes Japan記事掲載

渋谷とローカルの横断プロジェクト

micro development

渋谷とローカルで一緒に事業つくらないの？



「ふるさとイノベーションコンテスト」ファイナリ
スト選出／東急文化村「雑のつるし飾り」制作体験
実施／東海テレビ出演／伊豆新聞一面記事掲載

経血検査システムの開発&経血研究

reanne (リアンネ)

嫌な生理が、自分を知るための指標だったら？



Forbes「NEXT100」選出／東京都社会課題解決型ス
タートアップ支援事業TCiN採択／NEDO NEP 2025
躍進コース採択／青年版国民栄誉賞TOYP「衆議院
議員奨励賞」受賞

通信制が希望に変わる通信制サポート校

NIJIN高等学院

不安や退屈が消え、毎日が希望とわくわくの青春に
変わる通信制の形。不登校・発達障害をマイノリテ
ィで終わらせず、社会を生き抜く「武器」に育てる
教育とは？



Forbes6月号「NEXT100」選出／Smart City OSAKA
Pitch 2025「優秀賞」受賞／DMM SALON AWARD
2025-2026「ソーシャルインパクト賞」受賞

オンライン子育て伴走支援サービスの展開

OhMyFamily

史上最高難易度の現代の子育て。「子育て」
「家族」の形はどう変わっていくべきか？

Oh! My Family

Social Xアクセラレーションfor OKINAWA ファイナ
リスト選出／GESA全国大会出場／クラウドファン
ディング 総勢429人の支援により最終金額5,640,500
円の調達達成

Project Pickup

QWSから見てくるムーブメントの兆し

建築特化型画像生成AI

Rendery

AIは建築家を助けることができるのか



8,000ユーザー突破／3期連続黒字達成／日経新聞・建築専門誌など複数メディアに掲載／QWSでの出会いを起点に、クウジツ(株) (QWS会員) と「Maison Technology」を設立

犯罪から未然に子どもと地域を守る

SASENAI (サセナイ)

怪しい人がいたら大声を出すのが防犯の鉄則?!
いつまで子ども自身に身を守らせるの?



JR西日本グループ「ベルナル」採択／東京都「WE Impact Tokyo」伴走支援起業家に選出／NewsPicks「メイクマナー」出演

音との距離を調整するイヤークエア

swune earwear

人前で着けるのが気まづかった"耳栓"を、メガネのように日常に溶け込むアイテムへと進化させるにけろ



テレビ東京やJ-WAVEなど複数のメディア露出／スタートアップ実証推進事業採択・実証／YAMAHAグローバルピッチ 日本代表／QWS Startup Awardファイナリスト 複数賞受賞

3D撮影プラットフォームTAVIOの提供

TAVIO

3D/4Dが写真や動画のようなツールとなると、私たちは何を伝え何を残していくのか。



シードエクステンションラウンドにて1.3億円の資金調達達成／思い出を空間の中で体験する次世代プラットフォーム「TAVIO Dive」リリース／日向坂46のMVに「TAVIO ENGINE」提供

糖尿病患者向け食後血糖値予測

THE PHAGE

おいしい食事が薬になる未来とは?



アボット社・FreeStyleリブレとのデータ連携実施／福井銀行系ファンド採択

サギ被害を撲滅するプロダクトの開発

Tol Nexus

世界から詐欺をなくし自分と同じ思いをする人をなくすには?



兵庫県・兵庫県警との連携による詐欺対策への取り組みを実施／2025年度上期「未踏アドバンス事業」採択／2025年度「ひょうごTECHイノベーションプロジェクト」採択

Project Pickup

QWSから見てくるムーブメントの兆し

動物園・水族館から世界をひらくメディア

wizoo

目の前にいる動物たちに、我々はいままで当たり前のように会えるでしょうか？



全国の動物園水族館、フィールドでの取材発信活動／動物園での共創プロジェクト実施／保全型グッズの展開／CAMPFIREとの自然領域連携／渋谷ヒカリエや動物園での写真展開／Eテレアニメコラボグッズ展開

死を起点に文化を創造し社会の未来をひらく

リビングラボ from Death (デスラボ)

「死というテーマ」をどこまで豊かに想像し、よりよく生きるためのツール・サービスを産学官民で開発できるか？

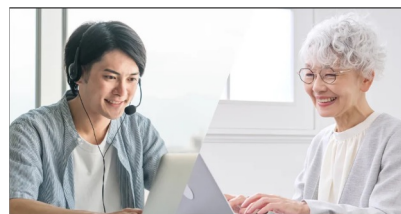


「Deathフェス2025」開催／日経新聞・毎日新聞、フジテレビ「イット!」「iBelieve」、J-wave他メディア露出140件／札幌でデス活POP-UP／国際団体Plena登壇、自治体講座実施

第3者による、大事な話題の家族対話支援

オヤシル Life Book

大事な家族への、大切な想いは、いかにして伝わりあうのだろうか？



ASACデモデイ オーディエンス受賞／東京都アクセラレーションプログラム「TOKYO Co-cial IMPACT」採択／週刊エコノミスト記事掲載

「デジタル名刺」の開発・製造・販売

プレーリーカード

出会いが豊かになるコミュニケーションとは？



「プレーリーカード for Business」の導入社数が100社を突破／企業・自治体所有の木材を活用した「デジタル名刺」を清水建設様と共同開発／グリーンドネーションによる植樹本数が100本を突破

ゲーム感覚ゴミ拾いイベント

清走中

ゴミ拾いを21世紀の遊びにするには？



新循環ソリューション「Garbon」始動／清走中イベント開催（柏原、西尾、上野）／葛飾経済新聞記事掲載／suumoジャーナル記事掲載

未活用公共空間の地域まきこみ型コンペ

まきコンペ

建築・都市計画のアイデアコンペは、まちや市民を動かせるのか？



助成プログラムSoil100採択／Social X Studio 優秀賞／鳥羽駅まきコンペ開催／暗渠商店街まきコンペ開催／裾野市高校生まきコンペ開催／毎日新聞、中日新聞、赤羽経済新聞、文教経済新聞掲載

Project Interview

QWSが注目したプロジェクトにインタビューしました！

単発のプレストから、
組織の“OS”へ——
QWSのキーパーソンたちと育てた、
ギャルマインドの長期的価値



株式会社CGO ドットコム
竹野 理香子（バブリー）
QWSでの活動プロジェクト名：
CGO ドットコム

CGO ドットコムは、「世の中のパイプスをアゲる」をミッションに掲げ、「誰もが自分らしく働くことができる社会の実現」を目指し、忸度なしのフラットな対話を武器に、企業の組織課題解決や人材開発に伴走しています。

——「点」のプレストから、組織の土台を育てる伴走型の事業へ

バブリー：QWSに入って5年。「ギャルマインドで世の中を変えんのだ」という思いだけで飛び込みましたが、当時は「ギャルは絶滅した」と言われていた時代。私は何の実績もない大学生でした。そこから、ギャル特有の年齢や肩書にとらわれないフラットなコミュニケーション能力や、ポジティブなエネルギーを活かして、企業と忸度なしで意見を出し合う「ギャル式プレスト®」を展開し、まさか今ではこんなに多くの企業様に活用していただけるサービスになるとは、当時は微塵も思っていませんでした。

そんな私たちのこの1年を振り返って一番の大きな変化と言えるのは、点だった取り組みが線になったこと。これまでは単発のプレストをサービスとして提供するのがメインでしたが、そこから派生して、ギャルマインドを会社の“OS”のように「組織課題の解決手段」として長期的にインストールしていこう、という動きが増えてきたんです。その一環として、上司と部下の対話を促す「ギャル式lon1®」というサービスを新たにリリースしたことや、自動車メーカーのスズキ様と長期的な組織開発の伴走をさせていただく機会が増えたことは、この1年を象徴する大きな成果ですね。

また、まさにQWSでの出会いがきっかけとなったJR貨物様とは、3年前からプレストを続け、2026年2月には、Z世代のリアルな声をブランドアイデンティティにして発信する「ギャル神社 by JR貨物」を渋谷で開催し、約1600人を動員しました。まさかあのJR貨物様が全部ピンクのクリエイティブでやるなんて異例中の異例でしたが、社長様から「運送業界自体がギャルマインドと通じている部分がある」とお言葉をいただき、全く遠い世界だと思っていた業界にも共感していただけたことが、私たちにとても大きな自信に繋がりました。

現在メンバーは約50名まで増えました。かつてギャルが消費されがちだった見た目や若さではなく、彼女たちのマインドや中身のスキルセットを評価して経済が生まれるこの事業に、メンバーからも「自信を持って『職業はギャルだよ』と言えるようになりたい！」という声があがるなど、前向きに活動してくれています。

——QWSという場と、キーパーソンたちのサポートがあってこそ見えた「長期的視点」

バブリー：こうした事業の広がりは、QWSでの出会いとサポートがあったからこそ実現できたと心から思っています。「ギャル式lon1®」の初導入はQWS会員のNOK様でし、繋がりから生まれた事例は本当に数え切れません。

特に、立ち上げ時期には、当時のコミュニティマネージャー・星川和也さんの存在に本当に助けられました。コロナ禍の頃、「俺、昔ギャル男だったんだよ」と声を掛けてくれて（笑）、「ギャル式プレスト®」の記念すべき1社目の三菱鉛筆様の調整から当日の仕切りまで、間に入って色々とお動いいただき、親身に支えていただきました。

そうして単発のプレストとしては少しずつ形になってきた一方で、壁にぶつかったのが「長期的な展開」でした。前例のないビジネスだからこそ、周囲に相談できず悩んでいた時、転機となったのがADDReC・福島大我さんのメンタリングです。街づくりを手掛ける福島さんから「10年、100年後の長期的軸でカルチャーを捉える」という視点を教わり、大きな学びになりました。単発のプレストから始まった事業ですが、試行錯誤しながらこの視点を持てたことが、結果として消費されない「目減りしない価値」に繋がったと実感しています。



——誰もが実は「隠れギャル」。「相手を変える」のではなく、本来の良さを引き出していく

バブリー：活動を通して気づいたのは、一見お堅く見えるビジネスパーソンの方々も、表現できていないだけで、心の底にギャルマインドを持つ「隠れギャル」だということ。当初は私たちが「変えてやろう」と思っていたのですが、実はそうではなく、フラットな対話を通じて「その人本来の良さを引き出している」のだと気づきました。

5年前、ある市役所様とのプレストがネットで記事になった時は「税金の無駄遣いだ」と叩かれたこともありましたが。でも最近また記事で話題になった時は、ポジティブなコメントばかりでびっくりして。この5年で社会の価値観が変わり、世の中が追いついてくれたような感覚があります。私たちがここまでやってこれたのも、ギャルという存在を一過性のバズで消費せず、自分たちで丁寧にカルチャーとして育ててこれたからだと思っています。

今後は、合同会社から株式会社へと組織を整え、外部パートナーと共に事業を拡大する予定です。そして、インバウンドの多い渋谷を拠点に、日本カルチャーが浸透する地域へ、文化的な価値を海外発信していきたいです。これからも、一人ひとりが自分らしく働けるような「アゲ」の瞬間を世の中にどんどん作っていききたいですね。

Project Interview

QWSが注目したプロジェクトにインタビューしました！

「死」をポップに語り、生を豊かにする文化を渋谷から。
多様な声と対話を通じて社会実装を加速させる「Deathフェス」



一般社団法人デスフェス

市川望美

QWSでの活動プロジェクト名：

リビングラボfrom Death（デスラボ）

一般社団法人デスフェスは、「生も死も、自分らしく選べるウェルビーイングな時代へ」をビジョンに掲げ、多死社会において「死」をタブー視せず人生と地続きのものとして捉え直すことができる社会の実現を目指し、今をどう生きるかを考えるイベント「Deathフェス」を運営しています。

——「問い」を社会に投げかける場所として、渋谷・QWSを拠点に

市川望美（以下、市川）：プロジェクトの原点は、共同代表の小野梨奈と長野でワーケーションをしていた時の語り合いです。彼女が自身の最期をどう迎えたいか話したことがきっかけで、火葬に代わる自然に還る新たな葬送「有機還元葬（堆肥葬）」を日本で実現しようと盛り上がりました。しかし、それを社会に実装するには、誰もが「死」についてカジュアルに語り合い、新たな選択肢を知る土壤が不可欠です。遠回りに見えてもそれが一番の近道だと考え、第一歩として立ち上げたのが「Deathフェス」でした。

新しい文化を生み出すなら絶対に渋谷だという直感があり、まだ社会にない「問い」を投げかける拠点として、QWSを選択しました。すぐに出口やソリューションを求めるのではなく、「問い」そのものを社会に投げかける姿勢を大事にしてくれる環境だと感じたからです。

——多様な価値観との交差とメンターの言葉が社会へ届ける力を磨く

市川：QWSに入会して印象的だったのは、コミュニケーターやコミュニティマネージャーをはじめ、多くの方が私たちのアイデアを面白がってくれたこと。「死」というテーマに対してフラットに壁打ちの相手になっていただき、大きな自信になりました。一方で、ビジネスの第一線にいる方から「死のことなんて考えたくない」と敬遠されることもあり、多様な価値観が交差する環境だからこそ社会のリアルな反応や自分たちのターゲットを早期に知ることができました。

また、QWSチャレンジに採択された際、メンターの為末さんから「社会に対してどういう伝わり方をするのかを考えないといけない」とアドバイスいただきました。それまでNPO界隈で活動してきた私たちにとって、社会全体へ広く届けるための伝え方や、人を怖がらせない工夫の重要性に気づかされたのは大きな転機です。さらにハヤカワ五味さんの「壮すぎてやりきれるか心配」という率直なフィードバックも、私たちがどのような世界観を築くべきかを客観的に見つめ直すきっかけとなりました。こうしたメンタリングや多様な方々との対話が私たちの視野を広げ、事業の土台を固める力になりました。

——フェスの広がり、多様な繋がりから生まれた1年の成果

市川：この1年、Deathフェスは予想を上回る反響を呼びました。初開催の2024年から毎年4月14日の「よい死の日」に合わせて渋谷ヒカリエで開催している「Deathフェス」ですが、初年度から2,000人の方が来場してくれました。重くなりがちな「死」というテーマをあえてタブー視せず、絶対にポップで誰でも語り合っているような空気感に

したデザインも功を奏し、第2回、そして今年（2026年4月）開催した第3回と規模を拡大する中で、NHKをはじめとする数多くのメディアにも大きく取り上げられました。

さらにこの第3回の中では、私たちが提供できる価値が具体的な形になり始めています。開発した「死に関する問い」が入った「ひとくち死生観クッキーDeath！」や、QWSでの繋がりから生まれたヤマハさんとのコラボによる、外界の音を遠ざけた静かなボックスの中で独自の音源と香りの誘導を使い、生と死のあいだを感じ体験型プログラム「AWAI」ボックスなど、目に見えるプロダクトが生まれています。



——フェスのあり方を変え、事業化へ。10年計画を見据えたギアチェンジ

市川：今後の展開として、私たちは「Deathフェス」そのもののあり方を変えようとしています。あの空間で、あの日数でできることはある程度見えてきており、毎年規模の拡大を目指してフェスをやり続けるだけでは限界が来るという危機感を持っています。

2026年8月から、法人として4期目に入ります。当初から「このプロジェクトは10年やろう」と決めている中で、最初の3年が土台だとすれば、中長期の成果が出始める4年目、5年目はすごく大事な時期です。ここで明確なインパクトや成果に繋がる手を打っておかないと、「死をタブー視しない社会」には辿り着けません。だからこそ、今後は事業としての形を整え、一つひとつの取り組みをクロージングしていくフェーズに向かおうとしています。

ありがたいことに、死生観クッキーを使って「若者向けの対話ができないか」という自治体からの相談や、「新しい霊園をユーザーと一緒に考えたい」という企業とのお話、保険代理店からの連携の相談と長期的な取り組みなど、具体的な手応えも増えてきました。

今後は、どこに種があるか分からず広げてきたこれまでのやり方から、できることを絞り、取捨選択をしていくギアチェンジのタイミングです。これからも多様なネットワークを生かしながら、「死をカジュアルに語る」文化を確かな形にして社会に実装していきたいと思っています。

Project Interview

QWSが注目したプロジェクトにインタビューしました！

学生の殻を捨てた大きな決断。
システムから自社運行へ、
医療・福祉の新たな「移動インフラ」への挑戦



株式会社mairu tech

大村 慧

QWSでの活動プロジェクト名：

mairu 〜予約したい福祉タクシー・民間救急がすぐに見つかるシステム〜

株式会社mairu techは、自力での移動が難しい方の移動の可能性を広げ、命と人生の豊かさを支える新しい移動インフラの形を追求しています。患者や家族の手配の負担を解消するシステム「mairu」の提供に加え、専門クルーと専用車両による確実な搬送サービス「mairu mobility」を展開し、誰もが安心して移動できる環境の実現を目指しています。

——システムから現場を担う運行事業者へ。真のインフラへの決断

大村 慧（以下、大村）：移動は人生を豊かにし、健康を保つ上で必要不可欠なものです。しかし、自力での移動が難しい方にとって、それは決して当たり前ではありません。その解決に向けて、私たちは当初、民間救急等の検索・予約システム「mairu」を開発し、事業者へ1件ずつ電話をかけて空きを確認しなければならなかった利用者側の煩雑な手配の負担軽減に取り組みました。

ただ、手配の効率化は進んだものの、真の移動インフラになるには、単なるウェブ上のマッチングだけでなく、オペレーションを規格化し、システムと密接につながる搬送サービスそのものを自らつくり、その運営に責任を持つ必要があると痛感したんです。社内で激論を交わした末、ITシステムの提供にとどまらず、自ら車両と専門クルーを抱えて搬送事業そのものを運営するという、この1年で最もハードで大きな転換となる決断を下しました。そうして誕生したのが、自社で搬送オペレーションを担う「mairu mobility」です。医療・介護の資格を持つ専門クルーと専用車両を配備し、事業者ごとにバラバラだった支援レベルや料金といった業界課題を解消。一律の明朗な料金体系と高い安全基準により、誰もが安心して利用できる体制を構築しました。

——車両1台から飛躍した1年。現場の声で確信したサービスの価値

大村：「mairu mobility」を始めたこの1年は、事業としても組織としても大きく成長した期間でした。前半はオフィスや車両の確保に奔走し、後半はとにかく現場のオペレーションを固める毎日。最初はわずか1台からのスタートでした。運用予定だった車両が盗まれたという、心が折れそうなトラブルもありましたが、それでも泥臭く前に進み続け、徐々に台数を増やして今では10台、今年度中には30台を目指しています。

実際に運行を始めると、個人の通院利用や病院からの手配など、多様なニーズがあることが見えてきました。特に印象的だったのは、「寝たきりの状態でも、東京から地元へ帰り、自分らしい時間を過ごしたい」という患者さんの声を受け、数百キロの長距離搬送を実現したことです。無事にお送りし、クルーが直接「帰れてよかった」という言葉をいただいたとき、自分たちのやっていることは本当に必要なんだと強く実感しました。

——「異様なほど高い評判」。熱量の高い議論を受け止めるQWS

大村：活動拠点としてQWSを選んだのは、起業家からのレビュー（評判）が異様なほど高かったから。毎日ワークスペースに入

り浸って作業をしていることが、自然と周りのコミュニティへとつながっていく環境が、当時の私たちの性に合っていました。当初は3カ月に1回QWSのステージで発表する機会があり、それが事業を進めるための定期的な進捗管理になっていましたね。

入会して最も印象的だったのは、QWSチャレンジで採択していたメンターの太田雄貴さんとの出会いです。最初の面談から、市場性やビジネスの実現性について、深く鋭く切り込まれ、事業に真正面から向き合ってくださいました。その後もエンジェル投資家となり、他の応援者となる方々を紹介していただくなど、横の繋がりでも厚くサポートしていただいています。

事業が本格化していく過程は、「学生という殻をちゃんと捨て、社会人として仕事をしよう」と組織の基準を引き上げた時期でもありました。私たちは誰が本当のコアメンバーとして、この先の事業に責任を持つのか、閉館ギリギリまで叫ぶように本音でぶつかり合うミーティングを重ねました。mairuは一切妥協せずに意見を戦わせるチームなのですが、こうした熱量の高い議論を許容し、受け止めてくれるQWSという土壌があったからこそ、今の強い組織体制を築くことができたと感じています。

——圧倒的な供給不足に立ち向かう。陸・海・空を繋ぐ移動基盤へ

大村：事業を進めていくうちに明確になったのは、解決すべきは需要ではなく「供給」の問題だということ。高齢化の進展とそれに伴う地域医療の推進に起因する圧倒的な供給不足に立ち向かうため、ひたすらにサービスの拡大・企画化・効率化を突き詰めていくしかありません。だからこそ、QWSのコミュニティも活かして、インフラ構築に向けた具体的な共創をさらに仕掛けたいと考えています。例えば、物流倉庫や広大な駐車場といった豊富な施設・設備を持つ企業との連携や、高齢者介護施設の開発にモビリティの観点から参画するなど、都市インフラのアップデートを見据えてやれることは山ほどあります。

ゆくゆくは陸上にとどまらず、ドクターヘリ等の空や海の移動手段とも組み合わせ、あらゆる領域の移動ニーズに応えていきたい。それが私達の夢です。自力での移動が難しい方も含め、誰もが当たり前に移動できる社会。そのインフラを今後も全力で創り上げていきます。



Co-Creation Case Studies 共創事例

QWSという舞台が生んだ、地域を沸かせる大ヒットコラボ商品——

メーカー×自治体×出版社×コラボ先の共創で実った、チョコパイから始まる新しい「旅のきっかけ」



写真左から順に

新潟県：武樋彰広、上田真之

株式会社ロッテ：山田佳之介

愛媛県：石川舞、加賀山真帆

QWSの会員同士を
マッチングさせる
「お繋ぎ」から
生まれた商品



——メーカーと自治体の課題を打破した「奇跡の出会い」

ロッテ 山田佳之介：昭文社さんの旅行ガイドブック『ことりっぷ』とコラボしたチョコパイの企画は、2020年のコロナ禍に「お菓子を通じて疑似旅行体験を提供したい」という想いからスタートしました。その後アフターコロナを迎え、単なる疑似旅行体験に留まらず、その土地にしかないお店とお客様を結ぶ「旅へのきっかけ」となる商品にし、地域活性化に貢献したいという想いに至りました。そこで自治体の方のリアルな課題を直接伺える機会はないかと模索していた時、QWSのコミュニケーターさんから、たまたまその場にいらっしゃった愛媛県のみなさんをご紹介いただいたんです。

愛媛県 石川舞：あの日はまさに奇跡の出会いでした。当時、私たちは首都圏でのPRにおいて「愛媛の南予（なんよ）地方にどう足を運んでもらうか」を課題にしていたタイミングでしたので、ロッテさんがこんなコンセプトの商品を作っているなら、ぜひ一緒にやりたい！と思い、すぐに県庁内に提案したんです。

新潟県 上田真之：私たちがQWSを利用しているタイミングでこのお話をいただいたのですが、まさに県全体のPRに繋がる新しい機会を求めているところでした。大企業であるロッテさんと、QWSという場所のネットワークを通じてこれほどスムーズに繋がることのできたのは、本当に大きなチャンスだったと感じましたね。

愛媛県 加賀山真帆：愛媛県は、大洲市で地元の方に長く愛されているカフェ「Ridi（リディ）」のチーズケーキをロッテさんにご提案して、「ことりっぷ ふんわりプチケーキ」として商品化していただきました。「愛媛県＝みかん」のようなわかりやすい特産品に頼るだけではなく、地域に本当に来てほしい場所や食を商品を通じてPRできるというのは、自治体として画期的な取り組みでした。

新潟県 武樋彰広：新潟県からご提案したのは、新潟市の沼垂（ぬまつり）テラス商店街にあるカフェ「編むと紡ぐ」でした。商店街全体で地域振興に取り組まれていますし、お店自体もニット産業が盛んな五泉市のルーツを汲んでいるため、新潟県全体の魅力を知っていただく良いきっかけになると考えたからです。ロッテさんには、同店の人気メニュー「焙じ茶のタルトショコラ」の味わいを、「ことりっぷ 小さなチョコパイ」として見事に表現していただきました。

ロッテ 山田佳之介：開発は試行錯誤の連続でした。それぞれの想いを形にするために、新潟県さんや愛媛県さんをはじめ、関係者の皆様とやりとりを重ね、妥協なく味づくりをしていきました。そうした苦労を経て、お客様にご好評をいただくことができたんです。

——「垣根を超えた本音の対話」と、全面バックアップが生んだ反響

愛媛県 石川舞：発売後の反響は凄まじかったですね。パッケージに「えひめ南予」と入れていただいたおかげもあり、地元のスーパーが特設コーナーを作って売り場をジャックするほど地域が盛り上がりしました。さらに「食べて美味しかったので、お店にも来てみました」と、実際に足を運んでくださる新規のお客様も現れ、お菓子が「旅のきっかけ」になるという成果がたくさん生まれています。

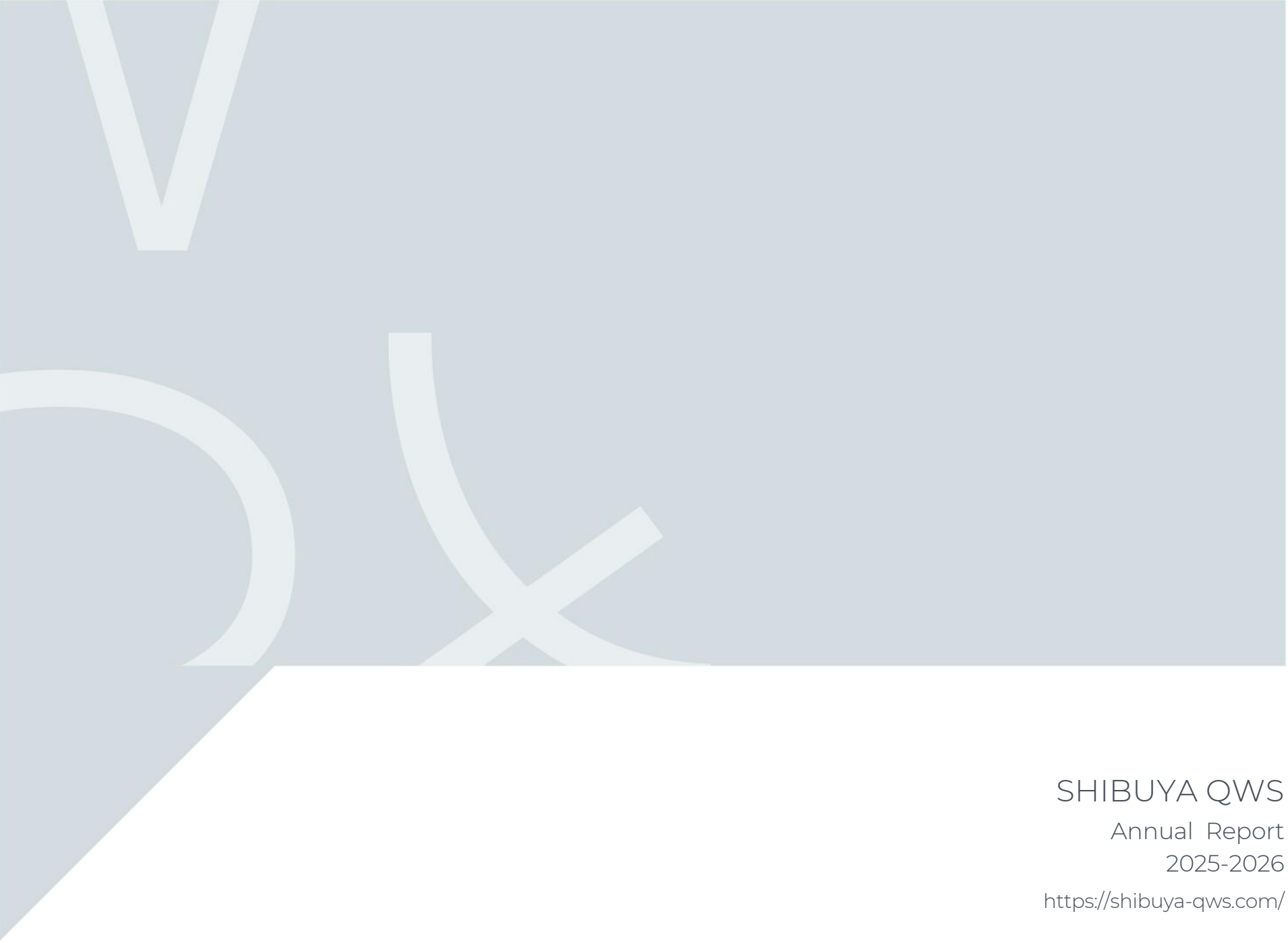
新潟県 上田真之：新潟県としてもSNSや県の定期発信を通じてPRも行いましたが、やはり全国販売の影響力はものすごかったですね。関東からお店に足を運んでくださる方もいたなど反響も大きく、私自身、子供の頃から大好きだったチョコパイと新潟県がコラボできたことは、まさに夢のような企画でした。

ロッテ 山田佳之介：とてもうれしいです。こうして企業や自治体といった垣根を取り払って活動できたのは、この場所のオープンマインドな空気に助けられた部分が大きいですね。また、何よりありがたかったのが、発表会実施に向けたQWSの皆さんのサポートです。協業先と一緒に発表会を行うことは当社としては珍しく、まず、どこで実施するかを検討していたのですが、その時に施設内の「クロスパーク」での実施をご快諾くださり、発表会に必要な備品の準備、会場設営など、合同発表会を全面的にバックアップしていただきました。そのおかげで、発表会も盛況でした。

愛媛県 加賀山真帆：本当に盛況でしたよね。自治体単独ではなく、皆さんと合同イベントまで実現できたのは素晴らしい経験でした。あの日の偶然の出会いから始まり、こうして完成した商品を再びこの場所に持ち帰ってこられたようで、非常に感慨深い一日でした。

ロッテ 山田佳之介：今回の取り組みは出会いから形になるまでの成り立ちが自然で、メディアにもその熱意を真っ直ぐに受け止めていただけました。単に美味しい商品を作るだけでなく、地域を巻き込みながらこれほど多くの方に届けることができたのは、企業と自治体を繋いでくれたこの環境があったからこそだと感謝しています。今回のご好評を受け、これからもこうした出会いを大切にしながら、地域活性化につながるような取り組みや、共に社会へ新しい価値を届けられるような、新たな企画の可能性を柔軟に探っていきたいです。





SHIBUYA QWS

Annual Report

2025-2026

<https://shibuya-qws.com/>